



間断なく降り続けた雨がこの時間だけ止まりました。まるで、流れ落ちる砂時計がその動きを止めたようでした。時が止まり、やがてその時間はさかのぼり、これまでの思い出が次々と浮かんできました。

3月18日、卒業証書授与式。体育館は、卒業生と在校生の思い出でいっぱいになりました。

卒業 — ようい、はじめ — (磨光版)

卒業生の答辞の最後、ステージから何人かが紙飛行機を飛ばしました。泣きながら投げた子もいました。この子たちの精一杯の「サプライズ」でした。



【卒業生答辞「僕らまた」】

事前にその動きがあったことは知っていました。でも「卒業式は『儀式』だから」と、一度は止めていました。それでも投げました。

言い聞かせたこととは違います。でも、なぜでしょう。投げさせてあげられてよかった。そう思いました。「自分たちで何かをしたい」「自分らしくいたい」。それが、あまりにもこの子たちらしくて。

ふと、3学期始業式に子どもたちに話した「365日の紙飛行機」を思い出しました。

「人生は紙飛行機 願い込めて 飛んで行くよ」

子どもたちは、この日に飛ばした紙飛行機に、何を込めたのでしょうか。

そのような思いを出してくる強さの一方で、ある子が見せた静かなよさも思い出されました。

修学旅行の時でした。カラオケで盛り上がるバスの中で、一人の男の子が飛べなくなったハエを手に包んでいました。目的地(清水寺だったのでしょうか。)にバスが着き、降車した友達が整列している時に、その子だけ、別方向の木の植え込みの方に行きました。そのハエをそっと茂みの葉の上に放していたのでした。

みんながそれぞれのよさを持ち、また、それぞれの道を歩み始めます。

前を見て進む 思い出を力に

式を終え、体育館を後にした子どもたちは、卒業生も在校生もみんな笑顔でした。

ドラえもんがのび太に語った言葉があります。

「すぎた日をなつかしむのもいいけど、もっと未来に目を向けなくちゃ。ふりかえってばかりいないで、前を見て進まなくちゃ。」

子どもたちの目は、いつも未来を見ています。ドラえもんの言う通り、感傷に浸ってばかりはいられません。

それでも、この6年間の思い出が、思い出すたびに心が温くなり、力がみなぎってくるような、そんな宝物になればいいと思います。

御卒業、本当におめでとうございます。



【笑顔の歓送】